

森立之の自筆稿本『本草経攷注』について

郭 秀梅

順天堂大学医学部医史学研究室

慶應義塾大学富士川文庫に所蔵される森立之の自筆稿本『本草経攷注』二冊がウェブ公開された。高画質で見やすいが、破損や虫損および汚損などで判読できない文字も多い。とはいえ今日まで失伝したと思われてきた、森立之が三十年間を費やした労作の自筆稿本の出現には、ただただ感銘するばかりである。

『本草経攷注』はかつて浄書本二種が知られていた。一種は台北故宮博物院所蔵本で、台北新文豊出版会社が1986年に影印した。もう一種は杏雨書屋所蔵の青山道醇浄書本で、筆者らが校訂して北京学苑出版社より2002年に活字出版した。この二種と今回の自筆稿本を対照すると、いずれにも稿本内容の欠落があり、おもに欄外に記入された森約之の注文や森立之の識語などだった。いま筆者はまず稿本の全文をデータ化し、さらに具体的内容を研究しようと考えている。そこで本報告では、森立之の自筆稿本『本草経攷注』（以下、稿本と略す）を紹介することにとどめたい。

稿本の上冊は巻上で、玉泉から麻ふんまでの上薬125種からなる。下冊は巻下で、青琅かんから腐婢までの下薬118種からなる。しかし巻中に収録されるべき雄黄から大豆黄卷までの中薬114種を欠落している。ゆえに本来は上中下の三冊が構想されていたかもしれない。なぜなら巻上と巻下に「福山森立之攷注」と署名する一方、巻上の目録と本文の間に「本草経巻中」と「江戸森立之攷注」の一行だけある。これは稿本段階の森立之が巻中の内容を意識していたことの証左といえよう。

稿本の版心上部には「神農本草経」、下部には「問津館蔵版」と刻される。安政四年頃、森立之は『神農本草経』の復元と『本草経攷注』をほぼ同時に完成した。すると『本草経攷注』には専用の稿紙がなかったため、『神農本草経』の稿紙を使用したのだろう。「問津館」は森立之の齋号で、彼の『素問攷注』や『傷寒論攷注』にも見られる。

稿本と青山道醇の浄書本にはいくつかの相違点もあった。浄書本は上・中・下薬が備わり、巻首の署名は「東都」あるいは「東京」森立之となっている。他方、稿本の欄外には森立之と森約之の注文のほか、海保漁村の朱筆注が二ヶ所あって漁村遺老・漁村老人と署名する。これら注文を書き入れた順は、立之・漁村・約之と考えられる。そして浄書本は森立之の欄外注を本文に書き入れたが、森約之の注文は一部しか取り込んでいない。

稿本巻上の上欄に「慶応乙丑冬十二月二十日攷森立之養竹枳翁男森約之拜書」とあり、『本草経攷注』の完成十年後に約之が注文を加えたことが明らかになった。また浄書本は約之の注文21ヶ所を収録しているが、約之の注文を立之の文として誤記したこともあるのは、稿本を見ると筆跡で分かる。例えば「螻蛄」に「慶応二年丙寅四月八日親見之驗知(略)」と約之の筆跡だが、浄書本が区別しなかったため立之の文と誤認されてきた。

稿本で最も注目すべきは、立之の識語が多く存在することである。浄書本には立之の序・跋文のほかに、稿本にある立之の識語が転記されなかった部もかなりある。これは浄書の際に意識的に取捨されたのか、森立之の意向に従ったのかもしれない。例えば、『本草経攷注』の「陸英」に立之の曰く「余在相州浦賀日、目撃病水腫死老婦(略)」とあり、稿本では欄外注に「所云老婦者、実家祖母清光院、俗称阿琴君也。歳八十五、以天保九年戊戌閏四月六日卒于西浦賀谷戸新町異国張屋南堂中。庚申閏三月四日記之」とある。また「白頭翁」には、「十月二十七日燈下書立之今日午時於營中館曉湖君発卒中證途中絶息不堪喟然矣」とある。しかし、このような公開する必要のない内容は浄書本に見えない。これら識語は学問と無関係かもしれないが、当時の環境や作者の思いなどがリアルに後世に伝わる。したがって、たとえ細かな資料でも史学の研究には有意義なものと言えるだろう。